
バカと? (クロス) と異世界

吉井 明久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと?（クロス）と異世界

【Zコード】

Z5664P

【作者名】

吉井 明久

【あらすじ】

バカテス短編集。自己満足の妄想巨編。それでもよければどうぞ。
(笑)

その1 アキまー（前書き）

短編集その1は、

『ネギま。』

場所は、6巻後半フェイトに『ディレイ・スペルをかけて、動きを封じたところから。

それでは、どうぞ。

その1 アキま！

巨大な光の柱が辺りを包む。

「オ、オイ！ 兄貴アレ！！」

「こ……これは！？」

稻光を伴つて現れたのは、2つの顔と4つの腕を持ち、天を貫かんばかりの大きさの巨大な鬼。

「ふふふ……」と天ヶ崎千草は不適に笑つて呟いた。

「一足遅かつたようですね？ 儀式はたつた今、終わりましたえ」

「「なつ！？」

「ハアツ…ハアツ…そ、そんな！？ ……こんな…こんなのが…」

「つか、デカツ！！ オイオイオイ！ ちょっと待てよデケえつ！
!! デカすぎるぜ！？」

ネギ・スプリングフィールドここに至るまでの戦闘と、フェイト・アーウェルンクスを止める為に既にかなりの魔力を消耗していた。ネギの焦りに拍車をかけるように、千草が告げる。

「二面四手の巨躯の大鬼……」

「ぐくり」と、知らずネギは唾を飲み込んだ。

「『リョウメンスクナノカ』。千六百年前に討ち倒された、飛騨の大鬼神や」

大鬼神の顔の位置まで、意識の無い近衛このかと共に浮上し、千草は愉悦の笑みを浮かべた。

「フフフ　喚び出しが、成功やな」

千草が大鬼神を　チラリ　と見やる。

「身の丈が十八丈もあるつて伝承やつたけど……こいつはそれ以上あるわ」

千草がネギに向き直つて構える。

「西洋魔術師の坊や。……どりあるつもりや？」

「い、いじここんなの相手にどりしきつんだけよ！」

肩のオゴジヨ、カモが叫ぶ。動搖しているカモとは逆に、即座に攻撃体勢に入る。

「！　兄貴！？」

「完全に出ちゃう前にやつつけるしかないよー」
「だけどよー」

カモの言葉を無視して、ネギは呪文詠唱を始め、

「ラス・テルマ・スキルマギステル！－」

手元が輝き出す。

“ウエニアント”
「来たれ
“スピーリトウス”
雷精
“アエリアーレス”
風の
“フルグリエンテース”
精！！！」

「うおおいつ！？ 確かに効きそなのはそれしかねえが、兄貴の魔力はさすがにもう限界だろ！？ そんな大技、今もう一度使つたら、倒れちまうよ！」

それでもネギは、唱え続けた……願いを込めた呪いの文。

“クム”
「雷を
“フルグラティオニー”
纏いて
“フレットテンペスタース”
吹き荒べ
“アウストリーナ”
南洋の嵐……」

さらなる輝きを増すネギの手元の光を見て、千草は焦りを顕にした。

「なつ……！ 何ツ！？」

“ヨウイス”

『雷の

“テンペスターース”

暴

“フルグリエンス”

風！……』

呼吸のできないほど凄まじい風と雷を伴った魔力光が、大鬼神へと向かう。

「つ……？」

目を瞑る千草に　　ズドオオオン！……と大気を揺るがす爆音と煙が包み込んだ。どうなったのかと、千草がうつすらと瞼を開けていくと……

「フ……フフフフフ……」

「あ……つぐ……！」

千草から笑いが零れ、ネギは息を切らせて呻く。

大鬼神『リヨウメンスクナノカミ』は無傷だつた。

「アハハハハツ！……」千草の高笑いが響き渡る。

「それが精一杯か！？ サウザンドマスターの息子が……まるで

効かへんなあ！！！」

「……ハアツ……ハツ、ハア……くつ……そおつ……」

ネギは力を使い過ぎて、膝をついてしまつ。

「このかお嬢様の力で、こいつを完全に制御可能な今！　もうなーんも怖いもんはありまへんえ！　明日到着するとか言つ応援も！」

千草は両の手を広げて叫ぶ。

「 蹤散らしたるわッ！　フフフ　……アッハハハハハハ！！！」

「こ、……このか、せんつ……」

「兄貴っ！　しつかりしろーーー！」

ネギの背後から……　ピシッ……パキヤアアン！　ガラスが割れた
ような音がした。

「　」「　」「

「善戦だつたけれど……残念だつたね、ネギ君……」

「フェイ……ト……」

(「マズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイ……これはマズイっ！　何か打つ手は、何か……ああっ！！　そ、そうかっ！　仮契約カードの……」)

『姐さん！　刹那の姉さん！　そつちは大丈夫か！？』
『カモ！？』　『カモさん！？』

神楽坂 明日菜と桜崎 刹那は鬼達から逃れながら、カモに返事を返した。

『力を貸してくれ！ こつちは今、大ピンチだ！』

「今そっちへ向かってるわよ…」

巨大な鬼を田にしてからずつと全速力で走っている。そんな時にカモから突然言われた台詞に、明日菜は焦燥から苛立った言い方になってしまう。

『それじゃ、間に合わねえっ！ カードの力で喰ばせてもうつぜー！』

「喰ふ！？」

カモは、明日菜と刹那に駆け足で説明する

「殺しはしない……けれど」

フェイドがネギへと歩み寄っていく。

「血に向かつて来たということは、相應の傷を負つ覺悟はあるといふことだよね？」

(『カモ君！』)

(『兄貴、まだだ!』)

「体力も魔力も限界だね。よく頑張ったよ、ネギ君」

フヒイトがゆっくりと手を伸ばしてきた。

(『やれつ、兄貴!』)

「…ぐつー..」「?」

ネギは空に仮契約カードを放った。

「召喚ッ！」

【エウオケム・ウォース】

ネギの従者

【ハリーストラト・ネギイ】

神楽坂 明日菜ーー！

桜崎 刹那ーー！」

ネギの田の前に、六芒星の魔方陣が展開され、光りだす。と、次の瞬間には、中から明日菜と刹那が現出した。

「アスナさん、刹那さん……。僕……すいません。このが、さんを

……」「わかつてゐる、ネギー！……つて！？ もやああーつー！？ 何よあれー！？」

明日菜の絶叫を無視して、フェイトは表情を変えずに淡々と尋ねた。

「……それで。……どうするの?」「え? えつと……」

端から答えを聞く気はなかったのか、何の前触れも無く、フェイトは呪文を唱えた。

「ヴィシュ・タルリ・シュタルヴァンゲイト……

「なつ! ? これは、呪文始動キー! ?」

「小さき王

八つ足の蜥蜴

邪眼の主よ……」

「! ! ! 姐さん! 奴の詠唱を止め

カモがこの魔法の危険性に気づき叫ぶが

「時を奪う

毒の吐息を

「ダメです! 間に合わないつ! ! !

刹那の悲痛の声が響き そして、呪文は完成する。

『石の息吹！！

【ブノニー・ペトラス！！】』

魔法煙が周囲を包み込んだ。

ネギ達を煙が呑み込む直前に、凜とした声と明るく力強い声が、
ネギ達の耳の奥に届いた。

『闇の吹雪！！！

【ニウイス・テンペスター・オブスクランス！！！】』

『氷槍弾雨！！！

【ヤクラーティオ・グラントイニス！！！】』

ネギ達が避難した先に、

「苦戦しているようだな？ 坊や」

「ネギ君、大丈夫？」

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルと吉井 明久が、学校
で会つた時の気軽さで、ネギ達に声をかけてきた。

「エヴァンジエリンさん！ 明久！」 「エヴァちゃん！ 明久しゃ
ん」 「明久、さん…までどうして？」 「バカの兄貴つ！」

みんな、思わず笑顔になる。

「あはは。言い辛いだから、呼び捨てでいいよ」

明久は嘔んだ明日菜と嘔みそつだつた刹那に、そつ告げた。

「いや、でも……」

「そんなことより、明久」

エヴァが鋭く目を細める。

「うん。あいつが朝倉さん達を口にしたクソやうひうだね？」

「クソやうひうて……」

「いいんだよ。だけど、あいつ……強い」

「アハハッ！　さすがだな、明久」

「ありがと」

「解るか」

「うん。……でも、エヴァちゃんの方が全然強い」

「“ちやん”付けするな、明久」

「ごめんごめん。解つたよエヴァ」

「よし」

鷹揚に頷くエヴァを見てから、明久は「さて」と枕を置いてフェイドに話しかけた。

「フェイド君……だけ？　待たせてごめんね？　待つてもうつて悪いんだけど、僕とエヴァが揃えば……史上最大最強で、無敵だよ？」

「…………は？」

「ふつー……あはははははっ！　明久、真面目に向を言い出すんだ

ネギ、カモ、明日菜、刹那は、一緒になつてすつとんきょうな声を上げるが、エヴァだけは爆笑していた。

「明久！ あいつはっ！」

「ネギ君、解つてる。あんな形なりでもあいつは、全盛期の時の本気のエヴァと同じくらい強い。 桜崎さんは、気づいてるかと思つていたんだけどね」

「すみません、まだまだ未熟です。私……」

明久の指摘で、少し落ち込む刹那にエヴァが自慢するかのように話す。

「桜崎刹那。貴様の未熟さももちろんだが、何よりも、明久がそれ以上に強大になつたのだ。普段は大したこと無いのだが……」

「…………だが……？」

「まあ、見ていろ。クツクツ……」

エヴァが楽しそうに答えた。

「最強？ ま、吸血鬼の真祖だからね。強いのは、当然さ。何せ本物の化け物なんだから」

「…………！」

フヨイトの言葉に、明久の雰囲気が変わる。

「アイツっ！」

「あーあ……」

「あーあ……つて、いいの！？ エヴァちゃん！」

「いやいや。いいも何も、本当のことだからな」「だからって！……」

「神楽坂 明日菜。黙つて見ていり」

「黙つてつて！」

「それに、な……明久はな」

「明久？」

「ああ。あいつは、私が傷つくのを嫌い、傷つける者に対して怒ってくれるんだ」

エヴァは、本当に嬉しそうに話す。ここが戦場だということを忘れて、ネギも明日菜も刹那も、思わずエヴァの綺麗な微笑に見惚れた。

「あっ。だから“あーあ……”だったんですね？ 明久を怒らせたら

ら

「その通りだ、坊や」

「エヴァ。こいつは、僕が倒すから、エヴァと茶々丸はあの『デカいのを任せると』

「力を貸そうか？」

「そうだね、パワーアップだけ」

「貴様に使うと反則としか思えんがな？」

「ははっ。まあその代わり、今度パエリアをご馳走するよ」

「ふふっ……好きなだけ魔力を持つていけ、明久。格の違いつていうのを見せてやれ」

「了解つ。my master.」

明久が契約カードを取り出し、エヴァが明久に強化魔法をかける。

「契約執行

【シス・メア・パルス】

18000秒間！－！－！

【ウーヌスミリア・オクトーミレー・アム・セグンダース！－！－】

エヴァンジエリンの従者

【ミニステル・エヴァンジエリン】

吉井 明久！！

「18000秒間！－！－？」 「パートナー！－？」 「契約したんです
ね」

「来たれ！

【アテアツト－】

明久の言葉と共に、アーティファクトである宝石の嵌められた、
サイズがぴったりの首輪が現れる。

「煌めきの輝石

【マギ・ストーネ】

「－」

明久の呪言にフロイトは、目を見開く。

「エヴァンジエリンさん！ 明久のアーティファクトつてまさか…
…」

「ククッ…坊やの想像通りだ。明久のアーティファクトは、 賢
者の石【エリクシル】さ」

賢

「 「 「 なつー？」 「 」

「ははっ、おかしいだろ？ バカに賢者の石を『』えるだなんて、神とやらも味なマネをする。 ん？ …始まるぞ」

明久が チラッ と刹那を見やつた。

「桜崎さん、近衛さんをお願いします」
「あ…はい！」
「エヴァ、手助けしてあげて」
「解ったよ。貴様も気をつけるよ？ 石になつても治してやらんぞ」「治せないんでしょ？」
「つるさい！ さつさと片付ける」
「ネギ君と神楽坂さんは下がつて」
「でも！ 明久一人じゃ……」
「大丈夫だ。信じて。エヴァの期待にも答えるし、君達も守つてみせる」

明久は、ネギの瞳をまっすぐ見て伝える。

「ね？」
「…………」
「ネギ。明久を信じなさい。アンタの兄ちゃんみたいなもんなんだから、弟が信じてやらないでどうするのよ？」
「え？ …えつと……」

明久を伺うように見るネギの頭を、 ぽん と叩く。

「そうだね。 ネギ。僕に任せて」

「は、はいっ！」

「じゃあ、下がつて」

「来るのかい？……では、相手をしよつ」

「リク・ラク・ラ・ラック」「リク・ラク・ラ・ラック」

呪文始動キー唱え始めた明久に、フェイトが高速で突っ込んでいく。

「ネギ、明久の声が2つ聞こえてこない？」

「え？……ホントだ。」

「えつ！？ 2つ同時行使！？ でも、間に合わない！」

「遅いよ」

明久の至近まで迫ったフェイトが、腕を振るおうと構えた瞬間に、詠唱中だったはずの明久からさりに声が聞こえて、

「氷爆！」

【ニウイス・カースス！】

「くつ！…」

(「二重詠唱！…」)

大量の氷を瞬時に出現させ、爆発させる。凍氣と爆風による攻撃で、フェイトは明久から距離をとる。……が、フェイトは珍しく表情を大きく動かしていた。

「契約に従い

我に従え炎の霸王…

【ト・シコンポライオン『ティアーノ・ネート・モイ ホ・テコラネ・フロゴス…】』

明久の詠唱を止める為顔面への掌底に、鳩尾への肘撃ち、蹴り飛ばして…と攻撃を加えるが、

「ふつ！」

「ぐうつ！？」「来れ

【エピゲネーテートー】

浄化の炎

【フロクス・カタルセオース】

明久の呻き声とは別に、詠唱の声が響く。

「がつ、ぐつ！……」「燃え盛る大剣

【ロンファイア・フロギネー】

ほとばしれよ

【レウサントーンピユール】

ソドムを焼きし火と硫黄

【カイ・ティオン・ハ・エペフレゴン・ソドマ】

「厄介だね……。

ヴィシュ・タルリ・シュタルヴァンゲイト…」

止まらない明久を強制的に停止させようと、フェイントも唱え始めた。

「罪ありし者を

【ハマルトートウス】

死の塵に

【エイス・クーン・タナトウ】[『]

明久の一つ目の上位魔法が完成と同時に封印術式を施す。

『特殊術式

【アルティス・スペキアーリス】

“焰により灰塵と化す” リミニット30 無詠唱用発動鍵設定。キーワード“煉獄”

術式封印！

【ディラティオー・エフュクトウス！】[『]

魔法を、ずらして発動することができない“遅延呪文”（ディレイ・スペル）の上位系である“条件発動”（コンディションナリイ）。遅延させる魔法の発動条件に“キーワード”を設定し、発動させる魔法を唱える、または念じることで一時的に魔法を封印しておくことが出来る。設定時間以内にキーワードを唱えることにより封印した魔法を発動できるが時間内にキーワードを唱えられなかつた場合、封印した魔法は無効となるが、強力無比の連携が可能。

キーワードを準備。^{セッテ}しながらも、もう一つ唱えていた魔法も詠唱を続ける。

【ウンデトリー・ギンタ・スピリトウス・オブスクーリー・イグニス
……】

「小さき王

【バーシリスケ・ガレオーテ】

八つ足の蜥蜴

【メタ・ゴークター・ポドーン・カイ】

邪眼の主よ

【カコイン・オンマトイイン】

フェイトの詠唱を破棄させる為、明久は攻撃魔法を発動する！

『魔法の射手・連弾・闇と炎の66矢！！

【サギタ・マギカ・セリエス・オブスクーリー・イグニス……】』

暗い闇の炎が燃え盛る炎弾と化す。

66もの魔法矢を捌きながらも、フェイトは詠唱を止めない。明久は、別の上位魔法の詠唱に入った。

「来れ、深淵の闇！！ 燃え盛る大剣、闇と影と憎悪と破壊つ！

【アギテー・テネブエラ・アピュシイ・エンシス・インケンデンス
エト・インケンデイウム】

「その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ……

【ト・フォース・エメイ・ケイリ・カティアース・トイ・カコ
イ・デルグマティ・トクセウスター……】

「復讐の大焰、我を焼け、彼を焼け。其はただ焼き尽くす者

【カリギニス・ウンプラエ・イニミー・キティアエ・デーストルク
ティオーニス・ウルティオーニス・インケンダント・エト・メー・
エト・エウム シント・ソールム・インケンデンテース】

『石化の邪眼！！！

【カコン・オンマ・ペトローセオース】』

先にフェイトの呪文が完成する。

『闇の吹雪！！

【ニウイス・テンペスター・オブスクランス！！！】

明久は、無詠唱呪文によつて対応するが相殺仕切れずに、脇腹に直撃した。

明久はダメージを負いつつもキーワードを叫ぶ。

「“煉獄”に呑まれろつ！！

『燃える天空！！！

【ウーラニア・フロゴシース！！！】』『「

キーワードによつて、術式が封印解除された。

フェイトを中心に、空を覆い尽くす爆炎。さらに、さつきまで唱えていた魔法も完成。

『奈落の業火！！！

【インケンティウムゲヘエナ！！！】』

明久の手のひらに黒き闇の炎を集めて、それを撃ち放つた。

2つの上位魔法を対処しているフェイトに、明久は、“本命”的魔法の呪文詠唱に入った。

3つ目の魔法。今、明久の使える最大数。アーティファクト解放によるブースト。魔力強化というよりは、進化というべきか……

(「耐えろっ！ 後ろには、ネギと神楽坂さんがいるんだ！ エヴァとも約束したじゃないかっ！」)

明久は、石化しつつある身体に鞭打つて、全てを出し切るつもりで言葉を紡ぐ。

「開け、冥府の扉。

現つに灯る蠹く、不死をも燃す灼熱よ。

焦炎の焰、無に帰す獄炎……。

世界へと降り注ぎ、蒼穹に染め上げろっ！」

爆炎と闇の炎が途絶え、代わりに、無数の蒼い炎が生まれる。

(「あれば不味い！ 人の身では解呪不可能であろう、僕の永久石化【アイオーニオン・ペトローシス】に匹敵する。……いや、それ以上か？」)

蒼い炎の現界と共に、明日菜以外（離れていたエヴァや茶々丸に刹那、千草までも）が、息を飲んだ。

エヴァ自信、予想だにしていなかつた。人の身で、“アレほど”のものを生み出すとは思つてもみなかつた。 というよりは、有り得ない。寒色系の色味が増すほど、炎の温度は高くなる。明久の出した炎は、人の身にある……まさしく、神のみ業。

「アスナさん、下がつて！」

「へ？ どうしたってのよ」

「炎は、寒色系の色味が増すほどに、温度が高くなるんですね！」

「ええっと……だから？」

「もう！ だから！ あ 解りやすく言いますと、あの蒼い炎の一つ一つが、太陽だと思ってください！！！」

「太陽！？！？ つて、明久は大丈夫なの！？」

「今は、大丈夫なはずです」

「今は。つて！」

「エヴァンジエリンさんの強化魔法がある間は、大丈夫だと思いますが、何らかの影響で途切れたりなんかしてしまえば、どうなるのか解ったもんじゃありません……」

「そんなっ！？ 明久は、解つて使つてるのー？」

「そのはずです。……あるいは」

ネギは思考することを中断して、明日菜を伴つてその場を離れる。

「ともかく、行きましょう」

ネギと明日菜が離れた瞬間に、蒼穹色が世界を包む。

『追…

【ウェス…】』

『断罪の劫焰！————！

【アウグストウス・アラストル・オブ・ディス！————】』

(「獄炎だの冥府だの言つてただけはあるな……
アラストルもアウグストウスも同一神だつたか……ディス（ゼウ

スの古い呼び名)の復讐に染まつたものだとも考えられているんだ
つた……か……明久が、な。……賢者の石は危険過ぎる。明久が
そこまで頭の回る奴ではなかつたはずだ。戦つているあの刹那で、
蒼炎を生み出すなど、化け物 っ！だからか…？あのアーティファクトが、噂程度にしか囁かれていなかつたのは、これか……

「茶々丸、刹那。時間が無い。明久にこれ以上、あの力を使わせる
わけにはいかん。急ぐぞ！」

「はい、マスター」「解りました！」

(「無事でいるよ、明久……。私の前から勝手にいなくなつてみろ、
許さんからな……」)

その1 アキまー（後書き）

これでおしまいです（笑）

少しでも楽しんでいただけたら、幸せ過ぎます。

その2 ガンパレード・サモナー（前書き）

短編その2は、
『ガンパレード・マーチ』
どの辺かは、想像にお任せいたします。
それにして、また吸血鬼。なんか好きみたいです（笑）
少しでも楽しんでいただきましたら幸いです。

その2 ガンパレード・サモナー

「戦い、「ひしょーゼ?」

「僕はね、」

「俺は蹴りとパンチがスゴいのな。んで明久が敵役な」

可愛らしい少年の言葉を飲み込んで活発そうな少年が主張する。

「やだよ! 僕も剣とか使うのがいいよ!」

可愛らしい少年も男の子なのだ。そこは譲りたくないのだらう。

「えー。…じゃあ、魔法使いだつたらいいだろ?」

仕方ないという風に言つた活発そうな少年に、否定の言葉を返す。

「それもやだなあ…」

何言つてるんだよ! と少年が力説していく。

「火とか雷とか出し、召喚もできるんだ!」

「召喚?」

疑問を持つた可愛らしい少年に向かつて返答する。

「ドーリゴンとかばあーん! って」

「おお! じゃあ僕召喚する! 召喚つ! …」

少年の言葉と同時に、辺りが淡い光に包まれていった。

「「え?」」

一人は驚きに声を漏らした。

可愛らしい少年、吉井 明久を中心^{よじこ}に、幾何学模様^{あきひさ}が足元から広がつていいく。

明久の友達は恐怖に顔を引きつらせ、

「こつちくんな! 化け物つ! …」

転げるようにして見えなくなつた。

「おいてかないでよ!」

暫く経つてから明久の声が聞こえた。「化け物じゃないよ……」と風にさえ埋もれてしまつような弱さで、俯いた頭に影がさした。

「……ん？」

何事かと顔上げると、思わず「はあ～」つといつ息。言葉にならないということを身に知り、自分の田にしたもののが信じられずにはじばたたかせていた。

「これを行つたのは……あなた?」

「えつと……」

透き通りのような月色の長い髪とエメラルドと見紛う輝きを持つた瞳に白雪のような肌をした女性。

子供達にも解りやすく言うのならば、お姫様。と言えば伝わるだらう。言葉にすることができなくなつてしまつほど美しく、神々しさを感じてしまふようになる。

そんな女性に声をかけられてしまえば、男の子はどうする他ない。

「違つてたかしら?」

明久は、ブンブンブンブン。と思いつきり首を振る。

「……わわ、解らない。けど、なんか、で、出てきた」

「そう」

女性が田を窄めて尋ねた。

「わたしが怖い?」

「そんなことないっ! あの……その……」

(「あ、綺麗だから」)

明久が思つていたことを伝える前に女性が微笑む。

「ありがと。あなたはいい子ね」

よく解らないが笑つてくれ、褒められた。思わず明久は含羞む。

「わたしはカーミラつていうの。あなた、名前は?」

「わたしはカーミラつていうの。あなた、名前は?」

「明久。吉井、明久」

これは名案だとばかりに指を鳴らして、カーミラは悪戯っぽく笑う。

「吉井明久、契約を交わしましょ？」

「けー やく？」

「そうよ。不思議な力のある優しい人あなた類に、幻獸王わたしが力を貸してあげる」

綺麗な顔が近づき

「あ」

明久の眼いっぱいに彼女の顔が映る。

「つ！？ んつ」

カリッ。音が聞こえたかと思えば、痛みが奔った。だがそれは、すぐに驚愕が塗り替えた。

彼女の綺麗な瞳と自身の瞳が絡み合い、異性特有の胸の内をくすぐる香り… そのする近さと口内に広がる鉄錆の味と彼女の甘美な唾液が、嫌でも唇を重ね合っているのだと意識させられた。

「ごくり…」

お互いのものが嚥下する。
えんか

「これで契約完了したわ」

「う、うん」

「うふふ…。初めてだつたのね、悪い事したわ」

「い、いえその…嬉しかつた、です……」

「ホント、真っ直ぐね。人類方の成長を期待しているわ」

「？？？」

明久は訳が解らず、首を傾げる。

「気にしないでいいわ。けれども、あなたは化け物じゃないってことだけは、心の奥底にでも止めておいて頂戴。

「じゃあね、明久」

「うん、解った。カーミラ、また会おうね」

「もちろんよ」

パチッとカーミラが片目を瞑つてみせると、明久は恥ずかしくなつて、顔を背けた。

その後すぐに顔を戻したが、そこにはもう彼女の姿は無かつた。

ゆわゆさゆさゆさ……。誰かが明久の世界を揺らす。少しづつ開かれた隙間に白い光が入り込む。余りの眩しさに、明久は呻き声をあげた。

「ん……っ んー……」

視界を覆つのは大きな猫。

「……ブータ？」

意識を手放していたのはどのくらいだつただろうか？

電子音が支配している小さな部屋に明久と大きな猫。それだけで、そこはいっぱいになつていた。

明久の今いる場所は、巨大人型戦車兵器の中。世間一般的には、土魂号と呼ばれている。

だが、明久が乗つっていたのは偶然の出会いによつて並行世界から來たと思われる、未来からの贈り物。土魂号以上の力や稼働時間を持つた土翼号。

土翼号は、フルアクションなら1時間保たない土魂号とは違つて、7時間も保つ。その為、戦場に多く駆り出される。

芝村 舞が「すまない。芝村として情けない……」なんて事を言って俯いていたのは記憶に新しい。

(「芝村さんも壬生屋さんも本当に、申し訳なさそうにしてたな……」)

「僕がやれる事をやつていいだけなのに。ね？ ブータ」

(『そなただけに背負わせる事が多く、悔やんでいるのである。』)

あれは、高潔だからな』(

「そうだね。芝村さんも壬生屋さんも、ね
土翼号の今の被害状況は軽微とは言へ難く、左腕を一本持つてい
かれてこる。

「はあ……原さんに怒られるなあ、『これは』

愚痴を零しつつ、ブーツの頭を撫でて、淀んだ空を見上げる。
寝起きだと言うのに微睡んだ田はしておらず、肉食獣のよつなギ
ラギラした明久の目。
何かを感じたのか、田線を下ろして田を細める。
地上だけでなく、空にも影が蠢ぐ。
……そう。ここはまだ戦場なのだ。

その戦場に月の色が煌めいた気がしたのは、あの夢のせいか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5664p/>

バカと？（クロス）と異世界

2011年10月10日05時14分発行